

感動との出会い

三宅 馨

三宅医院(岡山市)・院長

この度訪れた米国フィラデルフィアで、2人の偉大な人物との出会いがあった。1人はこのフィラデルフィアに留学した世界の医学史上最も有名な日本人医師、故野口英世であり、もう1人は数々の奇跡を生み出し、脳障害児の親に救世主のごとく慕われている、グレン・ドーマンである。

野口英世(1876~1928)の名前との出会いは幼少時に読んだ偉人伝であるが、私は異郷の大学で彼の功績を知らされ、同じ日本人として深い感動を覚えた。

野口英世、本名野口清作は、福島県猪苗代町に生まれ、2歳の時に負った大きな火傷のため、左手は木の切り株状になり、近所の子供たちからかわれた。くやし涙で泣いている清作に、母親はいつも「くやしかったら勉強しろ。それがお前の生きる道だ」と諭し、彼もそれに応えて猛烈に勉強したという。彼の左手にメスが入り、なんとか物を握れるようになったのは、今からちょうど100年前の1892年、彼が15歳の時であった。

当時最先端の医療技術を身につけて米国から帰国した医師渡辺鼎が近くの会津若松に医院を開業していたのも彼の幸運であろう。この手術に感激した野口は、医学の道を志し、後に渡辺医院の書生として住み込みながら勉強し、1897年、彼が20歳の時には早くも開業医国家試験に合格した。

彼は、伝染病研究所を経て、フィラデルフィアのペンシルベニア大学へ留学し、伝染病研究者として大成した。その後、ロックフェラー研究所に移籍し、蛇毒、梅毒、トラコーマ、小児麻痺、黄熱病等々の研究に偉大な業績を残し、後年アフリカのガーナへの運命の出発へと続く。「人生には、

出会いと情熱と努力が必要である」、「成功には幸運と良き援助が必要である」といわれるが、まさに彼にはすべて当てはまっていたようである。

さて、もう1人の偉大な人物グレン・ドーマンと私との出会いは、彼の研究所内のくつろいだ内輪のパーティー中であった。やや短身ながらシルバークレイの頭髪と立派な髭、子供のように愛くるしい瞳に人なつこい笑顔、低音で響きのある声が今も鮮明に思い浮かぶ。初対面ながら旧知の親しみを感じての挨拶の後、「もうすぐ孫が生まれるのだが、胎児の性別はいつ頃からわかるのか」と質問された。ふだんそれに興味を抱く私は我意を得たりと性別判定法から男女生み分け、さらには日本の社会現象である男あまり(出生児の性比による。年間5万人)と女性の初婚率の低下(20歳より35歳までの全女性の75%)等話をしていると、いつしか人垣に囲まれてしまい、質問攻めにあってしまった。これらの話題はどうやら万国共通であり、皆が興味を抱くものようであった。

グレン・ドーマンは、フィラデルフィア郊外の「人間能力開発研究所」を主宰し、脳障害児のリハビリ指導と幼児の能力開発に画期的な成果をあげている。私は、世界中の脳障害児に対してわが子のごとき情熱を注ぎ、人生を懸けてリハビリを試み、希望を与え続ける偉大な先駆者に脱帽するばかりであった。「赤ちゃんはどの子も天才」「親こそ最良の医師」と主張し、世界中の親子と共に「穏やかな革命」を实践躬行する原動力は、「子供たちへの限りない愛」であろう。豊かで平和な日本に生活する私たちも、身近なところから少しでも地球規模の「愛」を实践したいものである。